

# 中国の「官場小説」ブーム

## —その社会的形成要因と芸術的特徴—

鄭 成

### 要約

本論文では、1990年代より中国文壇に登場し、絶大な国民的ブームを呼び起こした「官場小説」（役人社会を題材に取り上げた小説）を対象として、その社会的形成要因と芸術的特徴を分析した。

「反腐小説」とも呼ばれる初期の「官場小説」は、官僚の腐敗不正を暴露し、社会的風習の改革を声高に訴えることで、役人の腐敗が深刻化しはじめた1990年代半ば頃、一時的ではあったが、圧倒的な人気を獲得した。その後、1990年代末に現れた「新官場小説」は、リアリティを追求する手法で役人社会生態の全般を描き出している。小説に描かれた官場を生きる人々の苦悩の姿には、中国社会の多くの問題が投影されており、読者から強い関心と共感を寄せられている。

「官場小説」における上記の二つの潮流に対して、本論文は中国の歴史的文脈との関連性からその社会要因を分析した。加えて、「新官場小説」の芸術的特徴についても代表的作品を通して説明した。

### はじめに

1990年代後半より、中国文壇に「官場小説」という旋風が巻き起こり、小説全体の出版部数の一割以上を占めるに至っている<sup>1</sup>。1970年代末以後の中国文壇を席卷した「傷痕文学」や「ルーツ文学」と同じように、「官場小説」は純文学と大衆文学の境目をなくし、国民から広い支持を勝ち取った。しかもここ十数年来人気が一向に衰えず、「文学離れ」と叫ばれて久しい中国文学の現状に一つの盛況を成している<sup>2</sup>。

「官場小説」の「官場」とは、「官界」や「役人の社会」という意味で、権力闘争に明け暮れる役人を暗喩する、マイナスのイメージをもつ中国語である<sup>3</sup>。今日の中国で、一般に、役人社会というのは党や行政機関の幹部によって構成される人間世界なので、「官場小説」とはこうした人間世界の出来事を題材にする文学作品を指す。

ところで、古来より中国社会では公権力を握る役人（現代では幹部と表現する）が特殊な

地位を有しているのは周知の通りである。とりわけ社会主義中国誕生以降、幹部らは政権を支える中核的存在となった。政権の権威維持の意味においても、1990年代まで長い間、人民に奉仕する幹部の英雄像を称えた政治宣伝的ものを除いて、彼らを文学創作の題材にする流れは定着しなかった。こうした歴史的経緯の中、今日の「官場小説」ブームはどのように位置づければ良いだろうか。

「官場小説」と言えば、幹部の腐敗を暴露し、官僚不正の一掃を訴えるというイメージが先行する場合が多い。多くの文学評論が「社会に広く存在する深刻な腐敗現象の暴露に力を入れ、腐敗反対闘争の難しさを訴える」として、まさに「官場小説」の社会批判の一面に注目し、高く評価している<sup>4</sup>。確かに、経済成長という巨大な時代のうねりのなか、金銭至上の風潮が社会の隅々まで蔓延し、公権力を私物化して、私利を図る役人や党幹部は後を絶たないという今日の中国で、多くの「官場小説」作品が、役人の腐敗に対して容赦なく批判を行い、国民の高まる不満を集約的に反映しているから、広く読者の共感を呼ぶことができた」と説明すれば、非常に分かりやすい構図である。

しかし、「官場小説」人気の理由は腐敗暴露に止まらない。なぜなら、腐敗告発の「官場小説」作品の大量出版と政府の度重なる腐敗撲滅キャンペーンにもかかわらず、幹部の腐敗は一掃されたどころか、むしろ悪化する一方である。国民不満のはけ口、腐敗反対の宣伝手段としての「官場小説」の限界がここに見えてくる。それに加えて、一党支配体制下の中国で、「官場小説」が政治体制の屋台骨をなす幹部の腐敗を暴露し、本格的な批判に徹した場合、国民の政権不信を増幅させ、深刻な政権批判としてとらえられかねないため、最初からある種の矛盾性を抱えている。「官場小説」の現実問題に対する暴露は表面上のものに留まっている」と、その社会批判の限界性を指摘する論者は少なくないのはそのためとも言える<sup>5</sup>。では、腐敗の暴露以外で、「官場小説」人気の理由はどこにあるだろうか。

本論文は、「官場小説」についての、日本での紹介がまだ手薄な現状に鑑み<sup>6</sup>、まず歴史的経緯、社会的形成要因との二つの側面から今日の「官場小説」の全体状況を紹介する。その上で、代表作品を通して「官場小説」の芸術的魅力とその社会的意義を分析する。

## 1. 「官場小説」の歴史的ルーツ

### 1.1 歴史上の「官場小説」

「官場小説」の歴史的ルーツは百年前の清末時代に遡ることができる。20世紀初頭の上海で出版された李宝嘉の『官場現形記』は近代中国の「官場小説」の嚆矢とされる。同作品は複数の物語を通して、風刺の筆致で私欲に走る役人の腐敗、無能ぶりを描き、清末社会の暗部を辛辣に批判している。『官場現形記』のほか、同時代に『老残遊記』や『儒林外史』などの小説があり、いずれも官場を取り上げ、その弊害と役人の腐敗ぶりを容赦なく暴露する

文学作品である。

厳密に言うと、『官場現形記』は役人腐敗を取り上げた最初の文学作品ではない。『官場現形記』より前に出された、四大古典小説としてよく知られる『水滸伝』と『紅樓夢』などの作品は、いずれも役人の腐敗についての描写が随所に見られる。役人の重圧を耐えきれず、反旗を翻した梁山泊の好漢たちの英雄的物語を綴った『水滸伝』であっても、栄府という名門一族の栄枯盛衰が展開された『紅樓夢』であっても、己の欲を満たすため、道德倫理を投げ捨てる役人の醜態についての描写が少なくない。また、宋の時代の爛熟した市民社会が描かれている『金瓶梅』も、商人と役人の癒着についての描写が実に多い。

## 1.2 「役人上位」という伝統中国社会の価値観

このように、古代の文学作品に官僚腐敗の描写が多かった原因は、まず「役人上位」という中国社会の伝統的権力構造と価値観が指摘できる。

古代の中国は儒教思想が支配する秩序社会であった。民衆が役人のことを「父母官」と恭しく呼ぶこの秩序社会では、役人と民衆の上下関係や相互の責務が明確にされていた。役人が民衆を自分の子供のように大事に守り、民衆が役人の命令に無条件に従うことが、当時の社会運営の理想像であった。実際に、役人は上から民衆を管理・監督し、民衆に対して絶対的権威を持ち、民衆の生殺与奪を握っているというのが一般的であった。このような社会体制の下、役人へのコントロールは役人自身の自己抑制に依存し、権力への監視体制は欠如するという問題点があった。

私欲に己を任せて、自制心を失った役人ほど恐ろしいものはない。私欲に走った役人が民衆をいじめて、悲惨な思いをさせられることは歴史上無数にあったことである。蓄積した民衆の憎しみが、いったん爆発したら、大規模な農民蜂起となり、時の王朝の崩壊に至り、押し止まることのない暴力の連鎖がおこる。このような過程の繰り返しがまさに中国の歴史そのものと言える。役人の絶対的権威は、民衆が服従または暴力を持って対応するしかない、というような厄介な存在である。

一方、役人の絶対的権威は、民衆の強い不満の根源でありながら、社会全体の強い役人志向の土台でもある。役人は、社会を支える唯一のエリート階層であるから、役人になることは出世を意味する。民衆の立場からすれば、役人の絶対的権力に抵抗できなければ、残された現実的な選択肢は役人の一員になることで、その特権を手に入れることである。千年以上にわたって、科挙に及第しての立身出世を幼少期から夢見て、読書に励む読書人が無数に存在していたのは、そのためである。有名な『範進中挙』という作品からも民間に広く滲透していた役人志向の熱狂さが伺える<sup>7</sup>。中国の現実から生まれた民衆の間に存在する役人階層への「不満」と「強い憧れ」の気持ちの混合が、中国の伝統的価値観の土台を成していると言えるだろう。

## 2. 「官場小説」の社会的形成要因

### 2.1 新中国成立直後の「官場小説」の萌芽

ブームを迎えるまで、「官場小説」には次のような歴史的経緯があった。

1949年の建国後、中国共産党政権は一党支配の体制を確立した。この体制の下、国が経済、教育、文化などの諸分野で政治統制を展開し、党による介入が常態化した。文学界も例外ではなかった。中共の硬直した文芸政策と度重なる政治運動の結果、作家の自由な創作が制限され、革命文学が文壇を支配していた。中共幹部や政府機関を題材にした小説は、政治宣伝の目的に供するものと化した。この時期は、区委に配属された若手幹部の目から見た党組織の不条理さを鋭く告発したという、王蒙の『組織部来的年輕人』(1956年)が「党を攻撃した」として痛烈な批判に晒されたように<sup>8</sup>、幹部社会の問題点を指摘し、社会批判を行う小説の創作には必要な社会的環境が整っていなかった。

ほぼ同じ時期、「官場」という用語も新中国の社会生活から追放されたことは留意に値する。『官場現形記』小説の影響もあって、「官場」という言葉は長い間、強いマイナスのイメージが付きまとっていた。共産党政権樹立後、当局の提唱する幹部の理想的な人間像にそぐわないため、人々の日常語彙から消えた。そのかわりに、平等な人間関係のシンボルとして「幹部」や「人民」などの新しい用語が導入された。しかし、度重なる政治運動に翻弄された末、人々は社会主義に幻滅した。幹部の世界は従来の役人社会と本質的に同じである、という認識が共有されるにつれて、「官場」という用語が徐々に復活した。それが後の「官場小説」の一つの土台となっている。

### 2.2 「官場小説」の登場と類型

1990年代初頭に登場以来、「官場小説」は次の三つの発展段階に応じて、三つの類型に分けることができる。

1990年代初めから半ばまでの最初の段階では、作品の数が少なかったこともあり、「官場小説」という名称は認知されていなかった。この時期の代表作は、劉震雲の『単位』、『一地鶏毛』、『官場』、『官人』などがあり、いずれも役人社会の底層を生きる人々を包み込む、息苦しい現実を取り上げている。『単位』や『一地鶏毛』は、政府機関の下層公務員の重苦しい日々がひしひしと伝わってくる。『官人』と『官場』では、平易な文体と陰湿で熾烈な権力闘争との小説内容が独特の雰囲気醸し出している。この時期は劉震雲のような優秀な作品もあるが、多くの作品が都市部生活の題材の一部と認識されている。以降の「官場小説」全体の展開を鑑みると、作品の数と長さの面では手がつけられたばかりの感を受ける。

1990年代半ばより、「反腐小説」または「反貪小説」とも呼ばれる作品が相次いで現れた。この種の作品の多くは、殺人すら辞さない、腐敗に手を染めた悪党の役人を前に、ヒーローの中共幹部が敢然と立ち向かって戦い、紆余曲折の末に、悪党が一網打尽されるという構成

になっている。代表作の『蒼天在上』（1995年）は、章台市で被害金額が1000万元を上回る公金流用事件が起きた後、新任の市長と市書記は強い使命感から、闇のボスである副省長を摘発するという内容で、その典型例とも言える。1995年、同小説はテレビドラマ化と相まって全国的に大ヒットし、大きな社会的反響を呼んだ。しかもその後政府の国家図書賞や中国図書賞などを受賞して、官民双方から絶大な支持を集めた。この時期の「反腐小説」は、いかなる猛威を振るう闇勢力であっても、最終的には打倒されるという物語構成を通して、社会主義中国では、正義は共産党の下で貫かれるものだ、と鮮明なメッセージを発し、強い政治宣伝的機能を果たしている。

1990年代末になると、「新官場小説」と呼ばれる新しいタイプの作品が登場して、今日の「官場小説」ブームを支える中核的存在に成長した。この種の作品は役人社会の様々な人間模様を中心に、急激な変貌を遂げる中国社会をリアリズムの描写手法で描き出している。作品ごとに内容は異なっているが、等身大の人間の視点を取り、安易な道徳的審判を避けて、リアルな人物描写に徹することが共通の特徴である。

「新官場小説」の嚆矢とされるのは、王躍文の『国画』（1999年）である。『国画』は主人公の朱懷鏡という中級幹部の昇進物語を通して、地方都市の役人社会の生態を克明に描き出した。その新鮮な切り口とリアルな人間像は強いインパクトを持ち、多くの読者を引きつけた。初版後のわずか2ヶ月で再版は8回に上った。しかし、その後の10年間は発売禁止とされていた。それでも、市場に出回った海賊版の部数が200万冊を超えるという人気ぶりだった<sup>9</sup>。

『国画』出版後、閻真の『滄浪之水』（2003年）、范小青の『女同志』（2007年）などの優秀な作品が次々と登場し、「官場小説」は新たな展開を見せた<sup>10</sup>。その大きな存在感は多くの本屋に「官場小説」のコーナーや棚が設けられていることから伺える。

今日の「官場小説」の作品群を見渡すと、「新官場小説」が主流を成しつつあるなかで、官僚腐敗の告発をテーマとする「反腐小説」がなお健在するという状況である。従来の反腐小説と比べれば、今の「反腐小説」はある種の変化が現れた。一部の「反腐小説」は邪悪対正義との構図を維持しながら、具体的人物描写や場面設定などにおいては「新官場小説」の手法を取り入れて、リアリティ性のある描写と人間味のある英雄像の創出をはかっている。そこには短絡的な政治宣伝から脱しようとの著者らの意図が伝わってくる<sup>11</sup>。

### 2.3 「官場小説」ブームの形成要因

今日の「官場小説」ブームの社会的形成要因は、以下の三つがある。

第一の要因として、中華人民共和国建国以来の最も深刻化した腐敗状況とそれにまつわる多くの国民の関心と不満が挙げられる。改革開放の国策の下で、国民のパワーが喚起され、計画経済体制下で数十年も停滞した国民経済が一気に活性化し、世界第2位の経済大国までに躍進した。しかし、政治改革が伴わない経済改革が独走した結果、権力を監督するメカ

ニズムは健全化されたどころか、むしろ法的、政治的な制度の整備が遅れて、幹部が権力を濫用する現象が日常化した。皮肉にも、空前の経済繁栄と比例するかのようになり、役人の腐敗汚職件数はその数と規模が年々増している。2010年末、中国政府が発表した『中国の反腐敗と清潔な政治の建設白書』によると、2003年から2009年までに、各地の検察機関が24万件以上の汚職事件を立件した。立件された案件が毎年3万件以上、毎日約100件前後に上るという計算である。立件されなかった案件を加えた場合、件数はさらに膨らむはずである。2010年の1月から11月までの一年間では、全国の検察機関が立件した汚職事件の数が11.9万件もあり、それまで7年間の半分近くに相当する。役人腐敗の深刻さが伺える<sup>12</sup>。

そのほか、従来に比べれば、役職の高い幹部が不正に走るケースが年々多くなることや、腐敗事件に関わった金額の高額化、海外に亡命する高官の急増などが目立つ。1995年、中央政治局委員、北京市党委書記の陳希同が逮捕されたニュースが全国に衝撃を与えた。これは中央政治局委員が腐敗という理由で失脚した史上初の事件であり、90年代以降の国家レベルの幹部の不正事件の第一号となっている。その後、2000年、全国人民代表大会常務副委員長、広西壮族自治区党委書記の成克傑が取賄で死刑判決を受けたことや、さらに2006年の中央政治局委員、上海市党委書記陳良宇も取賄で18年間の実刑判決されたことなど、閣僚クラスの幹部の腐敗不祥事が相次いでいた。これらの不祥事の取賄金額はいずれも千萬元以上に上っている。ここ数年、国の経済発展と腐敗幹部の私欲の暴走があつて、億元以上の不祥事も珍しくなくなっている。多くの国民は「国レベルの指導者まで腐ったのか」、という諦め半分、戦慄半分の思いだろう。

当局は座視するわけにはいかないため、摘発強化のほか、2000年より、外国政府との司法交渉に積極的に取り組み、海外に亡命した大量の腐敗幹部に対して法的な制裁を貫く姿勢を見せた。しかし、種々の活動は期待通りの効果につながらず<sup>13</sup>、かえって政権側の無為ぶりと制度的盲点を曝け出し、国民の諦める気持ちを増幅させてしまったのである。

国民の不信と不満が深まる中、腐敗一掃を訴える文学作品は自然と注目を浴びるようになった。腐敗反対の気運を高めるといふ当局の思惑もあつて、1990年代半ばに現れた反腐小説があつたという間に興隆した。ただし、反腐小説の多くは理念が先行して、ストーリーの展開や登場人物の描き方がパターン化する。さらに、多くの作品が不正事実への暴露やありきたりの道義的批判に終始し、または腐敗の根源的原因についての掘り下げが足りないという問題を持つ<sup>14</sup>。

第二の要因として、役人社会の独特の文化、ゲームルールに対する人々の高い関心である。

1970年代末に入ると、政治的規制が緩和されるようになり、経済建設が国運営の中心になった。しかし、役人階層が権力を一手に握る状況は一向に変わっていない。中国古代の役人と同じように、幹部たる人間は高い地位と優遇を保証され、人々の羨望的であり続けている。役人腐敗の横行はまさにこれを裏付けている。

さらに、近年、大学生就職難の問題が深刻化するにつれて、公務員の職は特殊権益と比類

のない安定性から空前の人気を集めるようになった。ここ数年、公務員応募者が急増して、「官場」への参入予備軍が未曾有の規模まで拡大した<sup>15</sup>。このことが社会における役人志向の向上に寄与したほか、これまでは閉鎖的、神秘的イメージがあった「官場」に対する人との好奇心をいっそう刺激した。「官場」に身をおく前に、その世渡りの術を少しでも身につけたいという気持ちが若者の間に広がった。こうした需要に応えるかのように、『国画』を代表格とする「新官場小説」は、熾烈な権力闘争から官場における人間の付き合い方まで、文学的手法で役人社会をリアルに描き、知られざる世界の実態を読者の前に展開している。現実世界の「官場」は作家の想像力を遙かに超えたほど複雑であり、小説から官場での世渡り術を勉強するのは意味がない、という王躍文のコメントがあるが、かえってこのような読者の受け止め方の存在を証明する恰好となっている<sup>16</sup>。

安徽省の有力誌『決策』雑誌社が2009年に実施した読者調査によると、「官場小説」の読者層は、政府機関の公務員が30.5%、企業メーカーの従業員が27.1%、病院、学校などの国営、公立機関の従業員が20.3%、という構成となっている。つまり、「官場小説」の描写対象である政府機関の公務員が、最も人数の多い読者層である。そのなかで、課長クラス以下の公務員が公務員全体の読者層の90%を占めている。自らのキャリアアップに資すると見込んで、小説を手に入れた読者が多くいるようである。『国画』を熟読できれば、大卒の新人は無駄な下積みも10年間省けるといふ読者の声が印象的である<sup>17</sup>。その意味で「官場小説」は一部の読者にとってはまさにマニュアルと教科書のような存在であると論じた人がいる<sup>18</sup>。

第三の、そして最大の要因として、大勢の読者を引きつけられる巧みな人間凝視がある。

改革開放は中国に未曾有の経済活況をもたらしたとともに、従来の社会主義価値観の崩壊をも引き起こしたため多くの人々は価値観の喪失という深刻な問題に直面している。ここ数年間、中国当局が伝統的祭日の復活、各地の文化遺跡の修復、「国学」と称する伝統教育の普及などを通して、儒教の伝統文化の提唱に力を入れている。それが今日の中国における信仰危機を反映している。

従来の価値観を失いかけながら、激しく変わる現実社会を懸命に生きようとする個々の人々とが、それぞれ重い課題を抱えている。熾烈な権力闘争、蔓延する腐敗、強いストレス、複雑な人間関係がつきまとっている「官場」に身をおいた人々は、その信仰危機が一層顕著となる。

「新官場小説」ブームの理由は、官場を生きる人々の姿に、人間の弱さと真実味を込めて描くことにある。そして、それが読者の共感を呼び、感動を与えている。その特徴と魅力について、以下、王躍文の代表作品を通して分析する。

### 3. 人間凝視の「官場小説」——王躍文の作品を中心に——

#### 3.1 王躍文の経歴

王躍文は、湖南省溆浦県の出身。1984年短期大学卒業後、地元の県政府に配属され、「政府の文書を起草するテクノクラート」として10数年の役所生活を過ごした<sup>19</sup>。1988年より執筆活動をスタートした。1999年、『国画』の出版をきっかけに、一躍脚光を浴びるようになった。同作品は役人の恥部を暴露したことで、上司の顰蹙を買ってしまい、2000年に人員調整との理由でリストラされた。結果的に『国画』は王本人の役所生活を終焉させたきっかけともなった。それ以降、王躍文は文筆業に専念して、『梅次故事』、『西州月』、『蒼黄』などと、10冊以上の作品を出して、堂々と人気作家の列入りを果たした。今日の王躍文は、彼の作品を抜きにしては「官場小説」を語れないほど、プロ作家としての確固たる地位を築き上げた。

大卒後から30代後半までの人生を地方の政府機関で過ごした王の経歴は、彼の豊富な創作素材の源泉となっている。本人によると、自分自身の性格が上司に諂うことが風習となっている役人社会になかなか馴染まなかったという<sup>20</sup>。それが役人としての彼に多くの苦痛をもたらしたとともに、役人社会の生態に対する外部者の目線からの批判的な観察を可能にし、さらに彼の作品に深い洞察と厚みを与えている。

#### 3.2 『国画』と『蒼黄』

彼の代表作品『国画』と『蒼黄』を紹介する。

『国画』は朱懷鏡という、数年も昇進の機会に恵まれていない中級幹部を中心に展開している。ある日、彼に転機が訪れた。トラブルに巻き込まれた義理の弟を助けるため、朱は機転を働かせて、自分が市長に近い関係にあるかのようなふりをし、企業経営者や地元の警察にアプローチした。彼の振舞いは、権力に近づきたい人々から予想以上の期待を集めた。彼らの力をうまく取り入れた朱は、市長個人の問題を解決し、そして、自ら市長に近づくことに成功した。市長の信頼を得た朱はその役人人生が一気に開花し、市の財政副庁長まで上り詰め、周囲から羨望の的となった。家庭を持ちながら朱はつい美人ホテル経営者と不倫関係となった。

しかし、人生最大のピンチが訪れるのはそう遠いことではなかった。市長が権力闘争で失脚したことで、朱は左遷され、さらに愛人の存在が明るみに出て、離婚の危機に迫られた。

1999年の『国画』が個人の境遇を取り上げるのに対して、10年後の『蒼黄』は、「官場」を生きる人間の群像を通して、21世紀初頭の中国役人社会の生態を一つの大きな絵巻にして展開している。作品の舞台は烏桕県という地方で、主な登場人物は以下のとおりである。県党委書記劉星明、県党委弁公室主任李濟運、県物価局長舒澤光、一般幹部劉星明（県書記と同じ氏名）、新しい県党委書記熊雄（劉の後任）。



小説は、烏桕県の県長選挙から始まった。民主選挙をアピールするため、県長選挙は「差額選挙」（複数候補者による選挙。定数枠と候補者が同じ場合は定額選挙という）を実現しようとした。差額選挙であるため、内定者以外の候補者が必要となり、県政府弁公室主任李濟運は県委書記劉星明の意思を受けて、友人の劉星明に候補者の役を引き受けさせた。

選挙当日、予想外の事態が発生した。県長内定者に投票された票数が足りないという結果が判明したとたん、上級機関は慌て選挙干渉を行った。投票結果を無効とした上で、投票権を持つ幹部らに指定した候補者に投票するよう説得した。2度目の投票結果は期待通りだったが、候補役の劉星明は過大なプレッシャーのせいか、選挙結果公表会場で発狂し、精神病院に送られた。

一方、県長選挙に先立って、物価局長の舒澤光は劉書記から偽装選挙への協力を要求されていた。気骨がある舒は劉を罵倒しただけでなく、自分の不満を周囲にぶちまけた。これが原因で劉の深い恨みとともに、一連の仕返しを招いた。汚職や買春などの一連の容疑を掛けられることになった舒は、無実を懸命に訴え続けたが、彼を取り巻く状況はますます厳しくなり、最後に劉星明の指示の下で精神病院に強制監禁されることになった。数ヶ月後、舒は入院先で自らの命を絶った。劉星明の命令に逆らえず、舒を精神病院に入れた李濟運には良心が苛まれる不安の日々が続く。

劉星明書記の強引かつ独断的なやり方は、ついに人心の離反を招いた。李濟運を含めた数人の幹部が劉の告発に踏み切った。劉が経済問題で書記を解任され、取り調べを受けることになった後、後任として熊雄が着任した。熊は本来、李濟運と腹を割って話ができる仲だったが、着任早々、李と距離を置くような態度を取った。間もなく、李濟運は省の交通庁に出向して、烏桕県から追い出されたことになった。

### 3.3 王躍文作品の特徴

#### 3.3.1 人間性への追求

王躍文作品の特徴の一つは、人間性への追求である。

『国画』では、主人公朱懷鏡とホテル経営者梅玉琴の不倫関係についての描写は従来の捉え方を超え、複雑な人間性をよく表現している。

『国画』以前の「反腐小説」は、いわゆる「不良風習」を批判するという目的もあって、役人絡みの不倫関係は権力と性の取引に過ぎず、肉体関係や金銭利益で結ばれているのだという図式で描かれている。このような単純明快な捉え方は、確かに道徳批判には便利である。

しかし『国画』の場合、朱懷鏡の不倫相手であった梅玉琴は実は有能かつ善良な女性である。彼女が朱と不倫関係となったのは何かの打算的考えによるのではなく、純粹に男女が引かれ合う愛情そのものであるという設定である。妻帯者である朱は自分の妻に負い目を覚える。妻の香妹も善良で心優しい女性だが、朱のキャリアアップにつれて、夫婦の間に次第に距離が生じた。収賄事件に巻き込まれた梅玉琴が逮捕された後、朱と梅の関係は終わったが、

梅のことが気がかりな朱は一度、彼女に会いに監獄へ行った。憔悴しきった梅の姿を見た朱は辛い思いをした。愛人を失い、官場で失脚した朱に残されたのは、家庭に戻り、夫婦関係を修復することだけであったが、小説の終わりでは、夫婦関係の冷え切った日々が続き、重苦しい雰囲気が流れている。小説に登場する不倫相手と家庭は、どれも簡単な図式で分類できない。己の欲と道徳倫理規範の狭間に激しく揺れる朱のイメージが読者に強い印象を残す。

このような描き方は相当のリスクが伴うためか、それまでの小説にはなかなか見当たらない。『国画』が初版三ヶ月後、発売禁止処分を受けた。原因は当局から明確に提示されることはなかったが、上記のような描き方による可能性が大きいと推測できる。しかし、そのような描き方こそ、読者の琴線に触れたのである。『国画』の膨大な発売部数や10年後の再版盛況もこの点を物語っている。『国画』以降の「官場小説」は、「不倫は悪」という、単純でスローガ的な立場寄りのものばかりではなく、より複数の側面から男女関係にアプローチする小説が多数現れた。多くの作品には『国画』の影響が見られるが、『国画』ほど不倫関係にある人間の複雑な気持ちを描き出した作品は少ない。

『蒼黄』にも優れた人間性描写が多数ある。小説では、県党委弁公室主任李濟運は30代前半にして既に県党委の常務委員クラスに登り詰めた、有能な幹部という設定である。李の有能さは、上司の意図を敏感に察知し、忠実かつ効率よく執行できるというだけでなく、各部署の利害衝突をもうまく調整できることにある。しかし、このような男ですら、書記劉星明の監禁指示に異議を申し立てることができなかった。県長選挙の事務運営を担当している分、誰より事情が分かるはずの李濟運は舒澤光に強く同情するが、それでも自分の意に反して、劉の指示を実行させざるを得なかった。舒澤光の自殺に接し、李濟運は大きなショックを受け、良心に苛まれる日々を送った。

上の二人はどちらも、官場を順風満帆に歩み、私欲を満たすために手中にある権力の濫用を躊躇わない、悪の象徴たる役人の代表でもなければ、正義のため命を捨ててまでして闇の勢力と戦い、凜とした善の役人の代表でもない。一介の人間を簡単に飲み込むような陰しく、巨大な官場の中で重い現実を生きていく、ただの人間に過ぎない。現実世界の読者には、簡単に善悪二元論で割り切れないこの二人の姿は、逆にしっかりと来るところがあるのだろう。

### 3.3.2 社会問題の暴露

王躍文の作品は、役人の腐敗だけに主眼をおくのではなく、21世紀初頭の中国地方の役人社会の生態図を展開して、社会問題を広く取り扱っているという特徴がある。この点は『蒼黄』が突出している。小説は地方の「民主」選挙、民衆の上訪（上級機関への告発）、政府の世論封鎖、やくざ社会と政府幹部の癒着、官財癒着と、役人社会と関連する出来事を中心に、中国社会の実態を幅広く取り上げて、社会の不条理を静かに見せつけている。

例えば、民衆の上訪問題という、現在中国の一大社会問題も大胆的に取り上げられている。濡れ衣を着せられた舒澤光が無実を訴えるため、烏桕県当局の目を盗んで省都に行って、省

の経済工作会議の会場に乱入して、省書記や省長などの高官に直接に陳情するという過激な方法まで試みたが、いずれも相手にされなかった。その挙句、精神病病院に強制入院させられてしまった。舒澤光は県の物価局長を務めた人物であって、官場のルールを熟知し、ある程度の人脈を持っているにもかかわらず、そのような結末だった。ましてや普通の人が自らの冤罪を晴らそうとする場合、その困難さがなおさらである。舒澤光の強制入院は一見作り話のように見えるが、現実世界で頻繁に起きている事件である。一部の幹部が、服従しない民衆を精神病にかかったとして、正当な法的手続きを踏まずに恣意的に監禁させることは、ここ1年あまりマスメディアに取り上げられるようになった。

『蒼黄』出版半年後、2010年4月マスメディアの報道で一気に全国に知れ渡った「程林東精神病」という事件がある。マスメディアの集中報道により、6年も精神病院に監禁された男性がはじめてその存在が世の中に知られ、広く同情を集められ、やっと自由の身に戻れた。しかし、公に報道された程林東の不幸はあくまでも同類の事件の氷山の一角に過ぎなかった<sup>21</sup>。事件が発生する半年前の時点において、王躍文が小説でこの問題をすでに取り上げた点は評価に値できよう。

中国内外から問題視される言論規制、情報封鎖についても、王躍文の作品に関連描写が見られる。インターネットは今日中国の人々が意見を自由に発表する数少ない場となっているため、政府は不都合の言論に対して極めて神経質になっている。ネット世界で、政府の規制と一般ユーザーとの攻防がつねに繰り広げられている。

『蒼黄』の烏桕県政府の宣伝部はその一例である。宣伝部は地元で何かの事件が起きて、政府の対応を批判するネット言論が多数出現した時、直ちに規制する。地元のサイトに漂流する大量の「網屍」（ネット上の屍体）が宣伝部の手柄とも言える。「網屍」とは、書き込みが不能となったスレッドという意味である。宣伝部の職員が問題発言のスレッドを見つけるたびに、ほかのユーザーがコメントを書き込めないようにして、スレッドの影響を封じ込む措置である。宣伝部部长朱芝が機転を利かせて、「網屍」と名付けた。そのような規制措置はやはり限界がある。烏桕県政府の宣伝部が直接にコントロールできるのは、県政府の公式サイト「烏桕在線」だけである。民間サイトの大量の書き込みには苦慮している。各サイトの管理者に命令を出し、一々削除を求めるのは、技術的に不可能な上に、言論の自由を妨害すると非難される恐れもある。そこで、部長朱芝が指示した措置は、人を雇って、政府批判の書き込みへの反論を書かせることである。ところで、地方の宣伝工作会議で、朱芝がその秘策を意気揚々と披露したら、満場の失笑を買ったという意外な展開になった。多くの地域が暗黙のうちにそれを実践していて、すでに常識のようなものとなっていたからである。このような様々な現実に関する優れた描写が王躍文の作品にちりばめられて、作品全体の真実性を増している。

### 3.3.3 精緻な心理描写

繊細な心理描写を通して、役人社会独特の雰囲気と人間関係が生き生きと描き出されることが王躍文作品のもう一つの特徴である。

『蒼黄』の前半では、県長選挙の準備期間中、一部の人民代表が県長内定者の陽明に金銭や物品を要求する事態が起きた。市の副書記田家保が主催する会議に烏桕県委メンバー全員が集まり、対応策を検討した。小説はここで淡々とした筆致がその場の空気と複雑な人間関係を見事に再現している。

「田書記が要領良く指示を出した後、その前に情緒的発言をした陽明は政治的にナイーブな人間のように映った。(中略) 暗に県長の座を狙い、陽明に嫉妬していた県委副書記の李非凡は喜んだものの、会場全体には一瞬、気まずい空気が流れた。皆それぞれ違う表情を取っている。李濟運は何気ない恰好を作って周囲を確認した。得意満面の李非凡に対し、劉星明が恥ずかしげな顔をして、(田書記の意見)に賛同を表明するかのようにしきりに頷く。陽明は完全に納得できない様子。一方、李非凡は「ほら、陽明を見ろよ」というかのように、全員一人一人に目で合図を送っている。それに察知した李濟運は素早く視線を戻して、恭しい表情で田家保を見上げることにした。こういう時は田家保に視線を注ぐのが、最も安全でかつ正しい振舞いである」<sup>22</sup>。

『蒼黄』の後半では、新しく着任した熊雄は、もともと李濟運とは腹を割って話ができる間柄であった。劉星明が無実の罪を人に蒙らせ、そして、独裁的手法で烏桕県を支配した時、彼は李と同じように強い憤慨を覚えた。しかし、着任早々、熊雄の態度が一変した。熊雄は李を烏桕県地元の土着勢力と見なして、強い警戒心を持つようになり、数ヶ月後、李を烏桕県から追い出した。王躍文は二人の互いの呼び方の変化を通して、この時期の二人の距離の疎遠を現している。熊雄が着任して一週間もないうち、親友の李濟運に対する呼び方は、いつもの「濟運兄」、「老同学(古い同級生)」から「濟運」と呼ぶようになり、最後に「李主任」に変わっていったのである。まさに、今日の友は明日の敵になるかもしれないという、官場の厳しい現実とその宿命的な悲哀が呼び方一つに凝縮されながら紙面から滲み出ている。

## 結論

本論文は、「官場小説」ブームという新しく見える文学現象について、その長い歴史的経緯と深い社会的要因を説明した。

古代中国は長い間、「役人上位」という中国社会の伝統的権力構造と価値観が支配的であった。このような社会体制は、制度的に役人腐敗の温床と化しており、役人腐敗を暴露する「官場現形記」という多くの文学作品の社会的土台となっている。近代以前の「官場小説」が主眼を役人腐敗の告発に置いていることは、「反腐小説」に共通していて、極めて興味深い点である。

今日の中国は、政治制度の不備による官僚腐敗がますます深刻化している中、伝統社会の価値観が根強く残っている。そのため、役人腐敗に対して、痛烈な社会的批判が展開される一方、民間社会の「役人志向」がますます強くなっている。この二つの傾向が「官場小説」の人気を支えている。しかし、「官場小説」の真の価値は、『国画』が代表とする一部の優れた作品が、空前の経済的繁栄と普遍的価値観喪失が共存する中国社会を彷徨い、私欲と道德の狭間で葛藤する人々の内面を真正面から切り込んで、読者の共感を広く喚起できたことにある。王躍文をはじめとする「新官場小説」作家らは、従来の硬直した道德説教の理念に束縛されず、繊細かつリアルな描写手法を持って、諸々の社会問題を大胆に取り上げて、これまで多くの優秀な作品を世に出している。その更なる展開に期待をかけた。

- 1 中国の『決策』雑誌の調査によると、2008年の「官場小説」の出版部数が118種類であったの対して、2009年1月から3月までの3ヶ月だけで、すでに123種類に上っている。中国作家協会によると、2000年以降、中国全国の長編小説の年間出版数は800～1,000部前後となっている。「官場小説」は相当の比率と言えよう。  
「官場小説」の出版数のデータは、王運宝の「官場小説調査」報告（『決策』2009年11月）による。中国全国長編小説の出版部数は、尾崎論文から引用したものである。尾崎文昭「底層叙述—打工文学—新・左翼文学」勉誠出版『アジア遊学』2006年12月、p.51。
- 2 1990年代半ば以降の中国文壇は、複雑な様相を呈している。テレビ、映画、インターネットなどの娯楽の多様化に加えて、文学創作における商業主義の浸透があり、文学作品、とりわけ純文学に親しむ読者の数が著しく減少して、一種の「文学離れ」が進行している。その深刻さは『收穫』、『人民文学』などの老舗文学雑誌の発行部数がピーク時の1980年代の100万部あまりから今日の数万部に落ちたことから伺える。  
一方、純文学の市場が縮小したにもかかわらず、社会問題に強い関心を抱く作家たちが執筆活動を継続したおかげで、個性豊かな作品が次々と出され、複数の文学的潮流が形成されて、活気が溢れ、中国文壇は百花繚乱である。例えば、社会の貧富格差に警鐘を鳴らし、貧しい人々の劣悪な生存状況を訴えるという「底層文学」が多くの知識人に憂慮深く読まれる一方、狼という文学的イメージを通して、中国の大国復興を訴えて、話題となっている「狼像」など、がある。
- 3 「官場」という言葉がいつ使われ始めたかは定かではないが、少なくとも清の時代に遡ることができる。清の趙翼の『遊雪崖洞甲秀樓諸勝』詩に、次の文句がある。「真成樂上樂、脱尽官場俗巢臼」。その詩から「官場」がやはり詩人にはマイナスの存在として映ることが分かる。
- 4 潘沅汶「20世紀90年代「反腐小説」創作的考察与反思」『鄭州航空工業管理学院学报』2004年4月、第23卷第2期、pp.40—42。
- 5 洪治綱「陷穽中的写作—論近年来長編小説創作（陷穽中的創作—近年来長編小説創作を論じる）」『当代作家評論』2002年第6期。
- 6 筆者が把握している限り、2000年以降、「官場小説」を取り上げた日本語論文は、宮入いずみの『「反腐敗小説」を読む「当代中国社会写実小説大系」から見えるもの』（勉誠出版『アジア遊学』2006年12月）の一本に留まっている。宮入は「官場小説」の一部である「反腐敗小説」の内容について、「巨悪を暴き、告発する作品もあるが、中には「当代中国社会写実小説大系」所収の作品のように、人間のしたたかさや心の弱さを描いている作品もある」（同上、pp.80—86）と指摘しながら、論文の主体が腐敗が横行する中国社会現状の紹介に傾き、主要作品についての説明は物語の粗筋に留まっており、「官場小説」の全体像が見えてこない。

- また、1997年12月8日号の『アエラ』は、「中国の闇を暴く、小説『天の怒り』と題して、当時の人気作である、腐敗した中共高官の悪行を告発する小説『天怒（天の怒り）』の粗筋や見所を紹介している。記事の著者はこのような小説を高官の悪事を暴くものとして位置づけている。
- 7 「範進中挙」は小説『儒林外史』の一部である。『儒林外史』は清末の呉敬梓が著し、当時の読書人の精神生活、社会生活を題材としたものである。同書は読書人の精神的桎梏となっている科挙制度の弊害に対して、風刺の手法で痛烈な批判を加えている。一生を科挙にかけた貧しい書生範進が、長年の科挙試験を経てやっと合格した。合格の知らせに接したとたん、本人は興奮のあまりに発狂したという物語は科挙制度に対する究極の風刺と言える。
  - 8 小説発表後、毛沢東は同作品を評価して、王蒙への風当たりがやや軽減された。しかし、後に毛沢東発言の真意は、反右派運動を発動するための世論作りの一環であったことが判明した。その後、王は右派分子と打倒され、1979年に復帰するまで、新疆で十数年の下放生活を強いられた。その間、中国文壇に『組織部新来的年輕人』のような作品が再び現れることはなかった。
  - 9 200万冊以上の海賊版との数字は王躍文本人の推測であり、その真偽を判断する材料が筆者にない。ただし、中国全土における海賊版の横行を鑑みると、200万冊との数字は決して納得できないものではない。なお、2010年によく出版許可がおりて、10年ぶりに再版された。その際、10年前の作品とは思えないほど各紙の紙面に数多くの記事が賑わった。10年ぶり、しかも200万冊の海賊版が出た後、再版が実行されたことが、同小説の根強い人気を物語っている。胡孫華「王躍文小説『国画』10年後再版」『長江日報』2010年4月26日。
  - 10 閻真の『滄浪之水』は、大きな理想を抱えた医学院生の池大為が、自分の初心に反して、役人としてのキャリアアップをがむしやりに図っていく人生を描いている。『女同志』は、万麗という女性の普通の職員から副市長の候補者までの成長過程を描いている。両作品から、主人公の肉体的成長の悩みとともに、人間社会としての「官場」の諸々の現実が伝わってくる。
  - 11 大木の『組織部長』（2007年よりシリーズとして出版しはじめた）はその一例である。若き党の組織部長賈士貞は、党組織内部の不正撲滅と人材制度改革を実現させるため、抵抗勢力との対峙を辞さず、危険を覚悟しながら一人調査を敢行した、まさに従来の幹部の英雄像と言える。小説では賈の行動に理解を示し、つねに精神的にサポートするという紅顔知己がいて、二人の間に男女の愛情に近いものがある、という設定になっている。賈を血が流れる男という人物像に仕上げたいという著者の創作意図が窺えるが、二人の付き合いについての描写は生硬さが拭えない。
  - 12 『中国的腐敗と廉政建設』白皮書新聞发布会召開（「中国の反腐敗と清潔な政治の建設」白書の発表会）中華人民共和國監察部公式サイト、2010年12月31日閲覧。<http://www.mos.gov.cn/Template/article/display0.jsp?mid=20101129035899>
  - 13 1999年、総額500億元に上る密輸入を行ったとして、中国政府から追われる頼昌星がカナダに逃亡し、中国政府からの不当な人権侵害を理由にカナダ移民当局に保護を求めた。その後、中国当局とカナダ司法当局の間にカナダ史上最大の移民司法交渉が続いて、2011年7月23日に頼が中国に強制送還されたのもって決着がついた。しかし頼昌星と同類の事件がまだ数多く、未解決のまま存在している。
  - 14 「反腐小説」のパターン化かつ現象的次元に留まる腐敗描写について、潘沅沅が詳しい指摘を展開している。潘沅沅 前掲文。  
黄佳能は、一部の作家が市場の嗜好に迎合した結果、「官場小説」の低俗化が招かれたと指摘している。黄佳能「長編反腐小説粗鄙化傾向透視」安慶師範学院学報（社会科学版）第22巻第5期、2003年9月、pp.55—59。
  - 15 2010年度の国家公務員に限ってみれば、募集枠が1.5万人前後に対して、応募者が130万人を超え、競争率が1対87に上るといふ。『2010年公務員報名人數超過130万、競争激烈』華東交通大学サイト、2011年4月23日閲覧。<http://www.ecjtu.net/html/info/jiaoyubobao/20091025/18299.html>
  - 16 徐穎「王躍文：跟小説学套路很荒唐」『新聞晨報』2010年5月5日、文化・総合面。
  - 17 「官場小説」の読者状況について、本論文は、王運宝「官場小説調査」に依拠している。「官場小

説調査」は、『決策』雑誌社が2009年10月に中国トップクラスの総合サイト新浪ネット、及び山東省膠南市党委学校と共同で行った調査の報告である。同調査はネット調査とアンケート調査の二つの調査方式を採用し、有効回答が690件であった。調査地域は北京、広東、山東、湖北、江蘇、四川、湖南、河南、上海、江西、安徽などと広い範囲に亘っている。調査の主な質問は、「誰が官場小説を読むのか」、「なぜ「官場小説」を読むのか」、「「官場小説」のどこに興味があるのか」などである。

- 18 李勇軍「正確閲読「官場小説」（「官場小説」を正しく閲読する）」『領導科学』2009年11月。
  - 19 張弘「王躍文自述、『「官場小説」』写作経歴」『政府法制』2009年、p.39。
  - 20 記者のインタビューで、自分が役人社会に適応できない実例として、王躍文は次の話を披露した。上の幹部が自分の事務室に現れたら、職場の同僚らはみんなすかさず立ち上がって、恭しく挨拶をする。しかし、王はいつも強い抵抗感を覚えていた。最終的にその雰囲気流され、立ってしまいが、上司の心証印象がかえって悪くなるという。最初からみんなと一斉に立ち上がることではないから。年末年始、上司の自宅へ挨拶に行くという役人社会の必須行事は、王躍文にとって苦手であった。張弘「王躍文自述、『「官場小説」』写作経歴」『政府法制』2009年、p.39。
  - 21 河南省農民徐林東が、鎮政府幹部の不正を訴えたため、2003年10月に鎮政府の幹部らによって密かに精神病院に強制監禁された。2010年4月、『中国青年報』、『南都週刊』、『瞭望』、『新華社』などの大手新聞マスメディアの報道を受けて、事件の存在が初めて知られた。身体を取り戻すまで、精神病院での監禁生活は6年半に亘った。この6年半の間、50回の縛り、55回の電気ショックと数多くの正体不明の注射を打たれて徐自身は二回の逃走と数回の自殺を試みたという。長期間の監禁は彼の健康状態を著しく悪化させた。精神病院の担当医師が徐林東が正常な思考能力を持つ、心身ともに正常であると認めながら、偏執型だと診断したという経緯が精神病院のカルテから分かる。全国報道を受けて、現地の政府幹部の行為は人権の蹂躪であると広く批判された。徐林東の監禁に直接に関わった4人の鎮政府幹部は解職された。解職された幹部らはスケープゴートに過ぎず、全国的に徐林東のようなケースはもっとあるはずであり、報道されているのは氷山の一角だけである、との激しい批判的書き込みが報道機関の関連サイトに多数見られた。程林東の監禁事件についての大規模の報道をきっかけに、多くの地方行政機関が精神病などの名目で人を違法に監禁する事態ははじめて国民の関心を集めるようになった。『蒼黄』は2009年に出版されたので、徐林東事件より半年先にこの問題を取り上げたことになる。
- [http://zqb.cyol.com/content/2010-04/23/content\\_3197856.htm](http://zqb.cyol.com/content/2010-04/23/content_3197856.htm) (中国青年報サイト、2010年5月17日閲覧)
- [http://www.ha.xinhuanet.com/xhfu/2010-04/27/content\\_19629610.htm](http://www.ha.xinhuanet.com/xhfu/2010-04/27/content_19629610.htm) (新華社サイト、2010年5月17日閲覧)
- 22 王躍文『蒼黄』江蘇人民出版社 2009年、p.31。筆者抄訳。